『しのびね物語』の位相

――物語史変貌の一軌跡――

神野藤昭夫

1

現存する『しのびね物語』は、平安末期の成立かと推定される散佚した古本『しのびね物語』の改作本である。現存本の成立については、江戸文明頃の擬作とする極端な説（黒川春村『古物語類字鈔』）もあるが、通説のように、南北朝期の成立とみるのが穏当である。間々、室町時代物語群の中に組み入れられるが、必ずしも他の室町時代物語群とは一括できない面をもち、鎌倉・南北朝期の物語の面影を伝えているとみてよい。従って、散佚古本と現存改作本との間には、平安時代物語と鎌倉・南北朝時代物語との時代相による質的懸隔を見出しうる可能性がある。

一方室町時代物語群の一角には、〈しのびね型〉とでも称すべき類型作品群が存在する。『しぐれ』・『わかくさ』・『桜の中将』（『桜町中納言物語』・『小伏見物語』とも）・『志賀物語』（『堀川の中納言の姫君』とも）・『扇流し』などがそれである。なかでも『しぐれ』は、『風葉集』所見の散佚物語『恋に身かふる』の改作とはされるが[注1]、現存本『しのびね』と酷似するばかりでなく、詞章上の直接影響関係（後述）まで想定されるのであって、注目すべき作品である。よって、単純な関係にはないにせよ、『しのびね』から『しぐれ』へ、という展開の系譜をたてることが許されよう。

つまり、現存『しのびね』を間にはさんで、散佚古本『しのびね』→現存改作本『しのびね』→『しぐれ』、という系譜がたてられ、それをたどるとき、平安の物語がどのように変改・改作されて鎌倉・南北朝の物語となり、さらに一転変身して室町物語化していったか、という物語の古代から中世への変貌の様相を、具体的に跡づけうる可能性をもった好個の事例にめぐりあったことになる。

だが事は冷静に運ばれねばなるまい。本稿では、現存本の分析を中心に、古本と現存本とのちがい、それらと『しぐれ』との比較をまず事実の問題として明らかにし、その上で右の眼目とすべき問題意識に接近しようとした。以下の冗長な叙述も、『しのびね物語』の位相、と題したゆえんも、このような意図によるもので

ある。

2

始めに散佚した古本の成立時期について既知の資料により整理することにしたい。

平安末から鎌倉期にかけて、『源氏物語』作者は、狂言綺語の罪により苦界に身を沈めた、という説が広く信じられ、読者の間には紫式部を救済すべく、経を供養し、願文を捧げるものまで出現した。大原三千院蔵『拾珠抄』第一冊中の『源氏一品経』は、このような紫式部堕地獄説を背景に成立しているが、物語が虚誕を宗とし、男女交会の道を語るものとして難じられている条に、当時広く流布していたとおぼしい物語類が引き合いに出されている。「有本朝物語之事　是古今所製也　所謂落窪・石屋・寝覚・忍泣・狭衣・扇流・住吉・吉水ノ浜松・末葉ノ露・天ノ葉衣・格夜姫・光源氏等也」[註2]とある中に、『しのびね』に関する初出記事がある。比叡山東塔竹林院にあって唱導説経に活躍した澄覚を導師として、実際に右の供養が行われたのは、永万二年（一一六六）を去ることそう遠からざる時期であったという。[註3] 古本は既にその頃には存在していたわけである。

寿永元年（一一八三）、賀茂重保の手になる『月詣和歌集』第五には、「ものがたりの名によする恋といふことをよめる／藤原伊綱／ぬれぎぬととふ人あらばいふべきに色（をイ）にぞしるき忍びねの袖」（『群書類従』本）の歌がみえる。伊綱は、藤原家基（？～一一三六）の息で、永暦二年（一一六一）正月、叙爵されている（『勅撰作者部類』）。同じく十二世紀後半における古本『しのびね』の流行をうかがわせる資料である。

さらに『和歌色葉』（建久九年一一九八）及び『八雲御抄』（文暦元年一二三四か）の物語名の条に、各々「しのびね」「忍禰」（ともに『日本歌学大系』本）の名を見出すことができる。

次いで、散佚古本の内容を推測しうる唯一の外部資料たる『風葉集』（文永八年一二七一）所載の三首（後掲）が位置する。

以上が、古本『しのびね』に関する外部資料のすべてである。

ここで再び『源氏一品経』に戻って蛇弁をつけ加える。偶々引用された十二の物語名は、当時相当に流布し盛名を得ていたものが恣意的に列挙されたにすぎなかろうが、うち七種までは十一世紀末までに成立していた物語である。無意識のうちに古い作品を挙げてみるという基準がたてられていたかも知れない。とすれば、古本『しのびね』の成立を十一世紀末くらいまで溯及させうる可能性が出てくる。だが残る諸作のうち『末葉ノ露』が例外的に十二世紀中葉の成立とみえるので、右の推測を強調することはできない。すなわち、『無名草子』に「人『末葉の露　海人の苅藻』とひとてに申すめれど、言葉遣ひなどもたゞありにぞあんめる」とあり、該書の書きざまから両者は同時代作品とみられ、その『海人の苅藻』（これも現存改作本に先立つ散佚古本）が「今様の物語」とされていること、及び藤原兼実が後白河院から下賜された『末葉露大将』第一の絵詞を所持していたこと（『玉葉』治承三年一一七九、八月三十日条）の二点をにらみあわせると、『源氏一品経』成立当時、『末葉ノ露』は、新作物語として盛名

を得ていた、とみた方がよさそうだからである。

右のような例外がある以上、正確なところ、古本『しのびね』は、平安末までには成立していたという以上にはいいえない。平安後、末期物語群のなかで捉えてゆくのが穏やかなようである。[註4]

3

現存『しのびね』諸本の所在については、『国書総目録』・『室町時代物語類現存本簡明目録』（松本隆信氏）に明らかにされているが、さらに二十数余の諸伝本を調査された桑原博史氏により、成立順序を異にする三種の系統に分かたれることが報告されている。[註5] ここでは桑原氏に従って、もっとも早い時期に成立したとされる第一系統本のうち、東京教育大学付属図書館本を以下の引用本文とし、まず梗概を作成することから始めたい。現存本の性格の一端を伝える年立的記事を煩をいとわず記し、所載和歌の所在も明らかにすべく留意した。

Ⅰ　時の内大臣の子息四位少将きんつねは容色秀麗、妹の春宮の女御とともに帝の殊遇を得ている。神無月の頃、嵯峨あたりに紅葉狩に出た少将は、小柴垣の宿の琴の音に誘われ、そこに絵巻に見入る姫君を見出し、一夜の宿をもとめた少将は、求愛の和歌を姫君の母（尼上）を相手としてかわした（歌①少将・歌②尼上）。卅日頃、嵯峨を再訪した少将は、姫君と契りをかわし、翌霜月二三日頃、乳母子の左中弁邸に迎え取った。翌月姫君懐妊。〔物語第一年・十二才〕

翌年八月、若君誕生。女君への愛情はいっそう深まる。秋、少将、宰相中将に昇進。〔第二年・十三才〕

若君をはさんで、五月五日、菖蒲に長き契りをこめ和歌の贈答（歌③中将・歌④女君）。女君の母は故式部卿宮の女、父は故中務宮であることが、乳母によって明かされる。

Ⅱ　秋、中将の忍び歩きを不快に思う父大臣は、中将と左大将の女との婚儀をおしすゝめ、十月末にと決定。両親のもとに若君まで引き取られ、二人は悲嘆に昏れる。十一月十六日、父の厳命に泣く泣く歌をかわし（歌⑤女君・歌⑥中将）、中将は左大将邸へ赴くが、盛大にかしずかれる姫君には心惹かれず、暁闇の鳥の音を待ちつけて帰宅、女君を慰めるのだった（歌⑦女君・歌⑧中将）。後朝の文も父大臣の督促にやっと贈る（歌⑨中将・歌⑩左大将の姫君）が、形通り三日通った後は廿日あまりも通うことなく、叱責される始末。悲嘆の女君のために、父大臣には内緒で若君を連れてきたりするが、かえって別れがつらい。〔第三年・三〇才〕

春、中将、中納言に昇進。帝の信望に左大将家の勢威も加わり、並ぶものとてない中納言だが、ひと知れぬ嘆きに女君のもとに籠るばかりである。三条邸を修築して女君を迎えんとする中納言の計画を知った父大臣は、左大将家の機嫌を損じてはと強く叱責、さらに中納言が宮中の七日間の物忌に籠ることになった機会に一計を案じ、中納言の女君への文を奪い取り、中納言が心がわりしたように告げて、遂に女君を追い出すことに成功する。

Ⅲ　女君は、尼上と親しい宮中の典侍の局に身を寄せ、典侍に出

仕を勧められる。一方、物忌果てて帰宅した中納言に残されていたのは女君の三首の歌（歌⑪⑫⑬いずれも女君）だけであった。悲嘆する中納言。宮中では、典侍の話に局に出むいた帝が、女君をひと目みて心動かされ、恋情を寄せるが、女君の憂悶の情をいぶかしいとも思う。霜月のある日、廷臣の管弦の中に、中納言の笛の音を聴きとめたしのびねの君（女君、この呼称の初出）の心は乱れる。中納言の憂いの姿にまた、帝は女君の憂悶もこのゆえかと想像して女君に問うが、女君は返答に窮し悲しむばかりである。だが、帝の恋情はこの為に妨げられることなく、しばしば女君のもとを訪れるのであった。

Ⅳ　雪の降る日、参内した中納言は、帝から心中を見ぬかれたような歌（歌⑭帝）を詠みかけられておどろく。その日、承香殿の辺をとおりかかった中納言は、帝の声の漏るるを垣間見て、日頃恋い焦がれる女君をそこに発見して驚く。やがて歌（歌⑮中納言）を贈り、女房中納言から事情の一切を聞いた中納言は、その夜女君のもとに忍び入って再会する（歌⑯女君）が、再会の喜びも束の間、帝の眷恋が二人の憂悶の種子であり、女君の将来をも考える中納言は、出家の決意をもらすのだった。帝に足繁く女君の局を訪れ、御心を尽されるが、女君はしのびねにのみ泣かれて靡かず悲嘆に沈むばかりである。〔第四年・五五オ〕

二人の再会を知らぬ帝は、承香殿に赴き、中納言に笛を命じたりするが、事情を知った中納言にはそれがいっそうつらい。いよいよ出家の決意を固めた中納言は、左大将家にそれとなく別れを告げ、女君のもとに紛れ入り、共に出家を願う女君をも欺いて、翌朝、随身みついへと横川で出家を遂げる。女君には、二首の歌（歌⑰⑱ともに中納言）と若君の将来を託す手紙が残されたばかりで、その行方は遂に知れない。

Ⅴ　今は一切の事情を知った上でのやさしい帝の愛情にも、女君の悲嘆は癒されない。五月雨の頃、形見の数珠と扇とを見て、女君は追想の歌（歌⑲女君）を詠むのだった。〔第五年・六八オ〕

年が改まっても、女君の悲しみはうすらぐことなく、ためにはじめこそ慰撫に努めた帝も、心をひらこうとしない女君に迫って、遂に女君は、しのびねの内侍と呼ばれる身となった。〔第六年・七一オ〕

翌春、帝寵あつい女君は若宮を出産、承香殿の女御とよばれる。〔第七年・七一オ〕

帝には皇子なく、二歳の若宮が春宮につき、女君も立后。内大臣家で成育した若君は七歳で殿上、中納言に似た面差に再会した中宮は涙ぐむ。〔第八年・七二ウ〕

中宮、うち続き宮達出産。〔第九年か・七二ウ〕

若君、九歳で元服、侍従となった。〔第十年・七二ウ〕

若君、十一歳で少将昇進。〔第十二年・七二ウ〕

若君は程なく中将に栄進、父中納言の行方を知り得て横川へ赴き、今は三十五歳になる父入道と再会。その話を聞いた中宮は、いまさらながら心を乱すのだった。中将は、その後二位中納言に、春宮は八歳で帝位を襲い、中宮は女院となった。中納言は折にふれ、山籠りの父を訪れている、という。〔春宮八歳の年、第十四年、その前後を記す・七六ウ〕

次に『しぐれ』の梗概を紹介する。こちらは平出鏗二郎の『近古小説解題』（明治四十二年版）により示すことにしよう。なお、次節以下の引用本文は、古典文庫『室町時代物語二』[註6]所収本に拠る。

i　二条万里小路の左大臣殿に姫君あり、女御に参るべき仰をうけしが、病の心地して、清水寺に参籠しければ、兄の中将さねあきらその安否を問はんため清水寺に至りしに、俄に時雨降り出だし、三条東洞院に住まへりし中納言きんかねの娘の傘なくして困りけるを見、己がさしたる傘を貸し与ふ。これが縁となりて、遂にこの姫を己が家に迎へて、契浅からず。

ii　しかるに左大臣殿あるとき左大将と約束して、中将に左大将の娘をもって娶すことに定む。中将はもとより三条殿と姫君との契深くして、左大将の女のもとに通ふことを好まざりしかば、左大将その北の方と謀りて呪詛することありしによりて、中将心惑ひて、今は三条殿の姫君のことは忘れたるものゝごとく、左大将の姫君のもとにとゞまりて明し暮す。

iii　三条殿の姫君これを嘆き悲しむのみなりしが、やがて己が召使へる侍従といふものゝ伯母に、丹後内侍といふものあるをたよりて身を託す。もとこの三条殿の姫君は七歳のとき女御の宣旨を蒙りたれど、早く父母に死に別れたれば、その事おのづから止みたるさまなりしものなるが、丹後内侍あるとき時の帝にこの姫の己が家にある由を内奏したりしかば、帝これを召さんとしたまふ、姫君は只管中将のことをのみ恋ひ慕ひて泣くのみ。帝強ひてこれを女御に召され、承香殿に置かる。これよりさき左大臣の姫君もまた女御に召されて、麗景殿に置かる、されど帝は承香殿にのみ通はせられて、寵愛浅からず。

iv　さねあきらの中将は帝が妹の麗景殿に通はせらるゝことなきを快からず思ひて、出仕することなかりしかば、帝怒りてこれを召させたまふ。中将途にさきに己を呪詛せし形式あるを見出し、始めて己が計られしことを悟り、更に当時寵嬖限なき承香殿のかの三条殿の姫君なることを知り、大いに慚じて、髻をきりて承香殿に贈り、俄に叡山の横川に入りて仏門に入る。

v　左大将の姫君もこれを聞きて剃髪し、左大臣もまた出家せらる。承香殿のみは寵幸いよ〳〵盛んに、皇子三人、皇女二人を生み、遂に皇后の位にのぼり栄ゆることを作れり。（以下略）

現存『しのびね』の骨格を洗い出すべく段落を施すならば、梗概中に記したⅠ～Ⅴのように五段落になろうが、その概要をさらに簡略化して示すならば、Ⅰ＝男君が女君を見出し、幸福な生活に入ること、Ⅱ＝男君と権門の姫君との婚儀により、女君が悲嘆のあまり出奔すること、Ⅲ＝女君が、新たな庇護者たる帝と男君への慕情の板挟みに苦しみ嘆くこと、Ⅳ＝事情の一切を知った男君が出家遁世を遂げること、Ⅴ＝女君が帝妃として世俗的栄誉を獲得し、遺子若君が父入道との再会を果すこと、のごとくになる。『しのびね』の各段をこのように概括すると、小異はあるが、基本的にはこれが『しぐれ』の場合にも転用可能であることがみてとれるであろう。Ⅰ～Ⅴは『しぐれ』のi～vに対応すると考

えられるのである。以下Ⅰ～Ⅴの順序に従って、現存本の性格、古本『しのびね』―『しのびね』―『しぐれ』の関係、展開等の様相を所期の目的に従って検討してゆきたい。

4

〔Ⅰ〕 Ⅰの部分の主題は、出会いと結婚といえるが、鄙の蓬葎の宿に思いがけぬ美女を発見するという古物語以来の型が、垣間見の趣向とともに底に据えられてあるわけである。現象的には、尼君と佗住いする女君発見の場面は、若紫巻を髣髴とさせ、一読『源氏』の影響下にあることを無視しえないのであるが、[註7] 現象的影響論の次元を超えて、物語の源初的根深さに由来するとみる視点をも同時に確保しておきたいのである。いわゆる擬古物語の常套的とみえる手法には、物語の歴史の表層をくぐりぬけ、突出し続ける物語源初からの化石的性格が露呈しているのではないか。

『源氏』にみえる〈昔物語〉の用例には、個々の先行物語に還元してはことすまぬ物語の典型性が沈められているらしい。[註8] たとえば、荒廃した末摘花邸を訪れた光源氏は「かやうの所にこそは、昔物語にもあはれなる事どももありけれなど」思い、宇治の姉妹を垣間見た薫は「昔物語などに語り伝へて、若き女房などの読むをも聞くに、必ずかやうのことを言ひたる、さしもあらざりけむ、と憎く推しはからるるを、げにあはれなるものの限りぬべき世なりけり」と思う。いずれも昔物語の型をなぞりつつ読むことを要求している場面とみてよい。鄙の女の発見には男（＝神・英雄）の流離（さすらい）の運命（＝貴種流離）がよみとれるとするなら、使い古され、枯渇した姿を晒しつつ、なお使い続けられる根拠は、深層構造としてある型の神話的機能にあるとみるほかないであろう。垣間見の源初性についても同断であり、このようなかたちによらないと物語が始まりえなかったのだ。

『しぐれ』では、清水籠りの妹を迎えに出た男君が、俄かのしぐれになやむ女君に傘を貸す、というかたちで出会いが変奏されている。同様の趣向例としては、しぐれに雨やどりした男君（殿の中納言）が絵に見入る姫君を垣間見る『木幡の時雨』、あるいはまた『今宵の少将』の場合などをあげることができる。趣向の由来する根深さとは別に、出会いの趣向が変奏されうるという意味で、ｉの発端部は可変的性格をもっていた、といえる。

『しのびね』の場合、発見による出会いが真直ぐに延びて、Ⅱ以下が引き寄せられるという関係になく、Ⅰの発見の型は女君の獲得による恋の成就の地点でワンサイクル完了し、Ⅱ以下の展開にはあらたな動因が要請されねばならないという意味でストーリーがプロット化されていず、ⅠとⅡ以下との間に緊密な構想的連関があるといえない。比較のために『夜の寝覚』の場合をとりあげてみるならば、方違えに来ていた女君（中君）を、男君（中納言）が垣間見て、但馬守の女と誤解してしまうことを、『寝覚』作者は夕顔巻を下敷きにしつつものがたり始めているが、女君と男君との「絶ゆる世」なき不幸は、垣間見時におけるこの誤解から発していて、ここの発見の型の設定のされ方は、全篇に及ぶ重要な構想上の起点となっているのであった。これに比し『しのびね』の発端部の構造は、Ⅱ以下との緊密性を強くはもたず、冒頭

の趣向を他に変換することも可能であると考えられ、可変的な室町時代物語の場合にちかいようである。

ところで古本『しのびね』の発端部はどうであったろうか。現存本では男君の妹はⅠで「御いもうとは春宮の女御、きりつほにておわします、とり〳〵にいとはなやかなる御おほえ、やむことなき御さまともなり」（一オ）とあり、帝寵あつい、既に春宮を生み奉った女御として紹介されているが、Ⅴでは、女君に皇子が誕生すると「いまたわう子もおわましまさぬ事」（七一オ）と語られる。後にもふれることになる（Ⅴ）が、二つの記述の間には矛盾がある。ケアレスミスともみうるが、「春宮の女御」という古本段階の設定を、現存本が不用意に踏襲したことに由来するとみたい。『しぐれ』では、男君の妹は入内して帝の女御となるが、承香殿にいる女君のもとに入りびたりの帝の姿にたいして、事情知らぬ中将は不快に思い出仕しないという報復的態度に出ることで、両者の確執がえがかれる(iv)。妹君を帝寵あつい人物として紹介しながら、帝がその愛情を傾けてゆく女君との間の何らの軋轢確執にもふれない現存『しのびね』より、意味づけはさて、人物設定の継承という点では『しぐれ』の方が、古本『しのびね』の面影を伝えている面があるかも知れない。[註9] 古本の発端部はもとより不明というべきなのだが、右の一例から推量するならば、人物関係の不用意の踏襲が、古本の発端部もまた現存本とそう大きく変るものではなかったことを、微かだが証しだてているとみえる。

〔Ⅱ〕 Ⅱでは、二人の幸福な生活を阻害する左大将の姫君の出現が語られる。一人の男をめぐる三角関係が成立することになるが、ⅠからⅡにかけての物語の叙述視点は男君に据えられていて、男君の側からその苦悩をえがき出す仕組みになっている。だが叙述の内側に入りこんで、女君の側から事態を捉え直してみると、ここで懊悩悲嘆すべき状況にあるのは、むしろ女君の方であろう。男君が女君を残して左大将邸へ赴くくだりは光源氏が紫上を残して女三宮のもとへ「三日がほどは夜離れなく渡りたまふ」場面（若菜上巻）や、匂宮が中君を残して夕霧の女六君のもとへ赴く場面（宿木巻）を想起させずにおかないのだが、それらの場面がそうであったように、女君の悲嘆の主題性を内在させているとみることができるのである。それがじゅうぶんに主題化されていないのは、男の側に叙述視点が据えられ語られていることによると思うのである。

だが、梗概中に示す歌⑤⑥および⑦⑧の贈答に注目すると、その内面についてそれまで多くの記述量をもたなかった女君が、危機的場面で出しぬけに男君に先立ち歌を詠みかけている事情は、古本をもふくめた先行同趣場面の方法に学んだものであろうが、現存本より古本の方が女君への視点により多く注意が払われていた証跡とみうるかとも思われる。この点はⅢ以下においてさらに追尋することにしよう。

『しぐれ』では、父親の妨害とそれによる女君の出奔という展開が、もっぱら男君の側から強調され、女君の悲嘆がこの部分の主題性を負うことはいっそう稀薄化している。『しのびね』で、男君が左大将邸を初めて訪れんとする夜、女君は「あられふりさゆる霜夜にをきわかれ今宵はかりやかきりなるらん」（歌⑤）の

歌を詠み、男君（歌⑥）と贈答の形をとるが、『しぐれ』では同様場面で、男君が「あられふるしもさゆる夜にをきわかれ身にたましいもなく〳〵そ行」の歌を詠じている。筋の酷似にとどまらぬ、両者の密接な関係を窺知させる事例のひとつだが、前者では歌のまえに「をりふしあられふりさむき夜なるに」という情景描写があるのに、後者ではいきなり「あられふる」の歌が出てくる。明らかに『しぐれ』の『しのびね』場面の利用変改である。しかも、女君の精一杯の訴えかけの歌が、『しぐれ』では男君の歌にすりかえられ、女君の歌が省略されているのは、男君の嗟嘆を強調する方向にこの部分が変えられていった証跡とみることができよう。

〔Ⅲ〕Ⅲに入ると、左大将の姫君にかわって帝が登場し、男をめぐる三角関係から、女をめぐる三角関係への状況の変化があり、物語叙述の視点も男君から女君へと転回させられてきている。この物語の題号〈しのびね〉は、この間の人間関係に由来する。

とうの中将ひやうゑのすけこん大納言なともさふらひ給ふに、みかとも御ことめしてなつかしくかきならさせ給ふ、このしのひねの君は、色〳〵にふきたてあそきゝ給ひて中納言のふえのねときゝしり給へは、そゝろにものかなしく、おなし雲井のうちながら、しられぬことの心うくて引かつきてふし給へり（四四オ・ウ）

〈しのびね〉の呼称の初出箇所を、第二系統の『桂宮本叢書』本と対校のうえ示した。ここの呼称出現のしかたは唐突である。それまで姫君と呼称されていたのが、いきなり〈しのびねの君〉と呼びかえられてゆく。以後、〈しのびね〉を冠する呼称十例が、姫君・女君の呼称と相半ばして集中的に出てくる。

〈しのびね〉の語感は、散文的に機能する語ではなく、歌語に由来するところの象徴性を帯びた詩的言語とみてよいだろう。試みに『国歌大観』を検索するに、重複歌を除外して、〈しのびね〉の語句をふくむ歌は41首を数えることができ、その意義を検討するに、Ⓐ忍音、Ⓑ忍寝の二類があり、Ⓐはさらに、ⓐ時鳥の初音をいう場合、ⓑ時鳥の初音を意味しつつ、忍び泣きの意をもかける場合、ⓒ時鳥とはかかわりなく特に悲恋おけるに忍び泣きを意味する場合、の三種に分かたれる。Ⓑは用例も少なく当該題号の意義に適合しない。次にⒶの語義変遷の跡をたどるに、ⓐ→ⓑ→ⓒの順に成立派生していったものとおぼしく、時鳥とかかわりなく悲恋における忍び泣きの意で自立的に用いられた例は、少なくとも41首のうちでは、時代的に下らないと出てこない。「忍びて物思ひける頃によめる／あやしくも顕れぬべき袂かな忍び音にのみぬらすと思へど」（後拾遺・恋四・相模）、あるいは「忍びねの袂はいろに出にけり心にも似ぬわがなみだかな」（千載・恋・皇嘉門院別当）の例歌にみるように、忍ぶ恋路における悲嘆のイメージをもつ語として、〈しのびね〉なる語は生成定着していったのであり、この物語の題号もここに由来するわけであろう。なお散文作品中の用例についても一瞥するならば、『落窪』1例、『源氏』1例、『更級』1例、『大鏡』1例、『とりかへばや』1例、

『無名草子』1例などで、『落窪』は巻三の屏風歌の条にみえる「郭公待ちつる宵のしのび音は」とあるもので⑧、『源氏』蜻蛉巻の用例は薫の歌「忍びねや君も泣くらむかひもなき死出の田長に心通はゞ」とあるもので⑭、であり、『源氏』以前の用語例としてはⓒがなく、いずれも歌語であることに注目される。『源氏』以後では『大鏡』昔物語の条にある「四月二日なりしかば、まだしのびねのころにて」とあり「ことなつはいかゞなきけんほとゝぎす」の貫之歌が続く用例は⑧にあたろうが、『更級』の去って行った継母を慕って「心のうちに恋しくあはれなりと思ひつゝ、しのび音のみ泣きて」とある例は、恋ではないが悲嘆のイメージを表現し、『夜の寝覚』の「小倉山をほど遠からず聞きし鹿の声々、かはらぬ音なひに妻恋ひわたるも、年ごろのしのび音によそへられて」(巻五)という例はⓒにあたり、『無名草子』の「ふりにし人は恋しきままに、人知れぬしのびねのみ泣かれて」(冒頭部分)という例も広義のⓒにあたる。いずれも詩的語彙感覚を残して散文脈の語になりきってはいない。以上は和歌の場合の調査結果と照応するとみてよいだろう。

迂路をたどったが再び『しのびね』本文に戻る。〈しのびね〉の呼称の唐突な出現は、古本段階における〈しのびねの君〉と呼称されてしかるべき場面叙述に現存本がじゅうぶんな配慮なしに凭れてしまった結果であろうか。あるいは逆に〈しのびねの君〉と呼ばれてしかるべき場面を排除しながら、〈しのびねの君〉の呼称は遂に排除しきれなかった、とも考えられる。いずれにせよこの物語の自己同一(アイデンティティ)を示すところのキーワードとして〈しのびね〉の名称はあるだろう。されば、かの『夜の寝覚』の女主人公が寝覚上と呼ばれ、現存本末尾にみえる「夜の寝覚たゆるよなくとぞ」という一文にその主題性が集約象徴されているように、〈しのびね〉もまたきわめて主題的な呼称なのであって、この物語の本来的な、すなわち古本の主題性は、恋の悲嘆に忍び泣く女君をえがくことにあった、と推量することは自然ななりゆきというものである。右の唐突な出現は、現存本が古本の主題性にたいし違和をかかえているということであり、ここからⅡに溯及して、Ⅱの段階で痕跡的に残されていた女君の悲嘆と連接させ、古本の主題の一貫性を透視することに魅力をおぼえる。だが、古本にあっても〈しのびね〉の語は帝を媒介にするところの人間関係の中から生成してくるとも考えられるので、この点を短絡的に強調することには慎重であるべきだろう。ともあれ古本から現存本への移行の過程にはしのびね的主題のなしくずしの後退、逆にいうならば新たなる主題の胚胎があったことは認められるように思う。なお検討を続けよう。

『しぐれ』では、この部分、どうだろうか。男君(中将)が呪詛のために左大将邸に釘づけにされ、事情知らぬ女君は丹後内侍を頼って身を寄せるが、仏名聴聞のため参内して帝に見そめられ、時折帝の側近く伺候する中将を目にして悲しむ女君も、乳母子侍従らの教訓に遂に帝に靡いたのであった。このような筋の展開は『しのびね』と大略相似るが、『しのびね』の女君が帝に靡くのが男君の出家後であったという一点は、古本の〈しのびね〉の主題性を一方の念頭におくとき、あらためて注意されてくる変

改である。つまり『しぐれ』では女君があっさりと帝に靡いてしまうという印象を与えられるのであって、さらに〈しのびね〉的主題が後退しているということになるからである。そこでなお注意深く読み直すと『しぐれ』では帝と女君との結びつきが自然なように配慮が加えられていることに気づかされる。『しのびね』にみえる若君誕生のことがないのは、男君との愛情関係の緊密さを緩和し、男君の権門の姫君との婚儀による悲劇性をも緩めていようし、発端部で語られている女君が三条右大臣の女で八歳のとき女御の宣旨を蒙っていたという前歴も帝との結びつきを容易にしているようだし、何より帝が男君の存在を知るように書かれていないのは、〈しのびね〉的三角関係がここでは不成立におわっていることを意味するだろう。『しぐれ』では、もはや〈しのびね〉的主題は一篇の眼目とされてはいない、とみてよいかと思うのである。

〔Ⅳ〕Ⅳでは、男君によって再び女君が見出されるものの、帝の女君への愛を知った男君は出家を遂げる。現存『しのびね』一篇の山場をなす。物語の叙述視点は再び男君の側に回帰しているが、女君の側から物語世界の状況を捉え直せば、女君が帝を許さぬ以上、女君の〈しのびね〉的悲嘆は続いているし、男君の出家においてそれはきわまることになる。現存本の世界でも女の側からの読みが不可能なわけではないが、この場の主題はやはり決然と恋をすて出家を遂げる男君の哀切な悲劇性に焦点がある。

この間の古本からの変容の経緯を窺いうる外部資料がこの部分に集中的に残されている。『風葉集』所載歌三首がそれであるが、まずこちらから問題に接近することにしよう。

① ないしのかみつれなきさまにみえ奉けれは七日の給せける／しのひ音のみかとの御歌

けふさへやたゝにくらさんたなはたの逢夜は雲のよそに聞つつ

（秋上・二二〇）

② せちに思ひける女にこゝろにもあらすへたゝりにけれは世をそむかんとていさゝかたちよりて／しのひねの中将

行末を何契けんおもひいる山ちに雲のかかりける世を

（雑三・一三七一）

③ ほいとけてのちおなし人のもとにさしおかせける

哀とも思ひおこせよしら雲のたなひく山に跡たえぬ空

（雑三・一三七二）[註11]

『風葉集』所載順に検討してゆく。①の類歌・類場面は現存本に見えないが、現存本の時の記述から探ると、現存本の物語第五年七月頃の記事、男君の出家のための失踪に女君が悲嘆にくれているあたりに該当する。既に三谷栄一氏の指摘されたところだが、現存本該当箇所には「秋にも成ぬ、よもの山へのもみちして色ゝにみゆるにも、かく世をそむきはつへきはしめにこそ、ありしさかにてみそめしも此世はかりの契りならしとおほし出るに、たゝ今の心地して恋しき事かきりなし」とあり、続く「御かとはとかく心をとり給へ共、さらにひとことはも御返事もし給はす」（六七ウ・六八オ）の一文に注意される。①の場面を省筆して、こう簡略化することは可能と考えられるからである。この部分についていえば、表面的には現存本は古本を簡略梗概化の方向で改[註12]

作されているとみられる。だが、それはどのような意図による、あるいは少なくともどのような結果をもたらす改作であったろうか。現存本の所載歌はすべて19首。多くは男君と女君との関係を軸とするもので、他は男君と尼君との贈答（歌①②）、男君と左大将の姫君との贈答（歌⑨⑩）、帝の男君への歌（歌⑭）であり、歌の面からいえば、帝のこの物語に参与する比重は重くない。古本が①の場面をもっていたことは、帝が訴える恋心に女君がつれなく拒みながら、男君へのつのる慕情に涙するさまが、現存本より精細に描写されていたことを思わせる。帝のかなわぬ恋の嘆きの場面をもつことは、女君の苦悩悲嘆を増しこそすれ矛盾するものではあるまい。逆に①の場面が簡略化されたことは、男君の出家失踪後の女君の〈しのびね〉的主題が後退することと関わるだろう。三角関係とはいえ帝の比重が相対的に減じ男君と女君との関係に焦点が絞られ、その結果、悲恋と知っての男君の決然たる出家行と女君の男君への愛慕を強く印象づけられる物語へと改作されることになった、と推察されるのである。

次の②および③は、物語展開の順序からいえば、①に先立つと考えられる。

②の歌をふくむ場面は現存本にはみえないものの、おおよそ現存本の筋の流れの中に置いて矛盾すると考えられないので、現存本の縮少梗概化の傾向を示すものといちおうみられる。しかし、この場合にも単純な簡略化とは考えられないので、②と現存本との間にある男君の心境の微妙な違和感について少しくこだわってみたい。

現存本では、物語第四年十一月の「雪かきくれてふりけ」る日、承香殿のあたりを徘徊していた男君は、偶然「虫のくひたるあな」から、帝とともにいる女君を発見する。侍女の話から一切を聞き知った男君は「はかなかりける事かな、さてもかくとをはしまさは、いとめてたかるへき御ことなり、みつからもいかなる野山のすへにもとちこもらめ」とたちまちに自らの恋を諦め出家の意志を固める。女君との再会の時には既に心は決まっていた。男君は「何事も此世ひとつならぬ事とおほして、今は上の御心にしたかひ奉り給へ」と女君に教えさとし、さらに「身つからは此世いくほとならぬことなれば、はちすの露をもあきらかに、玉とみかくまてこそかたらめ、心のかきりはをこなひて、つゐにすゝしき道にをもむきなは、九品のうてなにはをなしはちすのさをもわけたてまつらん、此世のたいめむはこよひはかりこそかきりならめ」（五三オ）という。年明けて物語第五年二月、いま一度別れを告げにあらわれた男君は、共に出離を願う女君に「くれはとく御むかへにまいらむ、たとへくし奉るとも、あかくなれはいとみくるしからん、又さりとて此まゝあるへきならす、さやうによういして待給へ」と「まことしくいひをし」へて、その夜「すいしんのみついへ」だけをともなって横川に赴いたのであった（六〇ウ～六二ウ）。右の再会後二度の逢瀬にみられる男君は、女君への愛憐の情に引かされつつも、その幸福を願い、心底ではひとり決然として出家の道を思い定めて揺るがない。かようの別離であればこそいっそう哀切な場面となりえているのであった。現存本をこのように読むならば、対比的に②の、「いささかたちよりて」二

人の過去を悔いる「行末を」の歌を残し去ってゆく男君の姿にはなにかしら未練がましいふっ切れぬものを感じさせられるのである。「いさゝか」にこだわれば、②の場面は、現存本のように二人の逢瀬を山場として出家の道へと歩んでゆく重要な契機として位置づけられていたかどうか疑問になるし、引続く③の「哀とも」の歌にも男君の未練がましさが感取されるようである。[註13]

③の歌は、現存本の歌⑰「有明の月は雲井にすみはてゝよをこそ山のおくにいるとも」および歌⑱「思ひいるみ山かくれのすまゐにもかたみにつなく人のおもかけ」と場面趣向において類似する面をもつ。⑰の「すみはてゝ」は、桂宮本では「すみはてよ」とあり、後段の女君の栄耀との符号が感じられる歌であり、⑱は女君への愛執を表白する。③の歌は右の歌⑰⑱に並置されてあったが、三首目なるがゆえに省略されたか、とする三谷栄一氏の推定説がある。[註12] 現存本では、男君が横川で出家を遂げた後、「かくて京には……をわしまし所を殿母うへ御らんすれば文二あり、一つは北の御方へとあり、一つはしよきやうてんの中納言のつほねへとかき給へる」とかたられるが、後者の「文」のなかに歌⑰⑱はみえるのであった。だから③の詞書「ほいとけてのちおなし人のもとにさしおかせける」はこの間の事情とほぼ重なるものとみてよい。だが、⑱に続く男君の手紙には「うちすて奉ることいかにうらめしくおほすらん、されとおもふ心あれは、ひたふるにおほしそ、今はたゝ御かとの御心にたかわてさふらひ給へ」(六五ウ)とあり、このような文脈では、③のような男君自身への追慕の情をもとめる未練がましい歌は矛盾するのであって、かりに三谷説のようであっても、改作の際には必然的に省かざるをえなかったのである。男君の未練がましさが払拭されることは、現存本における男君の形象のあり方に関わる問題であって、過去を断ち切って決然出家を遂げてゆくがゆえに二度の逢瀬の場面は哀切なものとなりえているのであった。現象的には現存本が、古本の梗概筋書化の傾向にあるようにみえながら、両者を作意の異なるものとして質的に区別して捉え直すことが要請されているように思われるのである。

さて『しぐれ』に目を転ずると、こちらでも男君の出家に続いて三首の歌が残されたことが同様にかたられるのだが、その二首目にみえる歌「きみゆへに山のおくには(ママ)(み山のおくに—多和本)入ぬともあわれとたにもおもひをこせし」は、『風葉集』歌③の「哀とも思ひおこせよしら雲のたなひく山に跡たえぬ空」の上句と下句とを倒置して改作したものとみてよく歌意はかわらない。③の歌が現存本にない以上、両者の関係を考えると、松本隆信氏も想定されたように、[註14]『しぐれ』が古本『しのびね』をも、現存本を超えて源流にしていた証跡とみなさざるをえない。では古本『しのびね』→『しぐれ』であったかといえば、現存本『しのびね』→『しぐれ』でもあったのであって、現存本との筋の酷似および〔Ⅱ〕で明らかにしたような密接な利用変改の跡をうかがわせる事例があるのであった。一方、1でも述べたように、『風葉集』所載の「おなしてらにこもりて思ふ事かなふさまに侍りけれは/恋に身かふる頭中将/あなたふとかれたる木にも花さくととける誓は今そしらるゝ」(釈教・四九四)は、『しぐれ』の、男

君が傘を貸した姫君と契る場面で「これそほとけのりしやうと、ありかたくそ、なかめ給ひける」とあり「たのもしく（たのもしや―多和本）かれたる木にも花さくととけるちかひはいまそしらるゝ」と詠む歌に、初句だけ改作されて残されている。〈恋に身かふる〉とは恋が原因で出家する意であろうから、話の冒頭部だけの類似とばかりはされえないのであって、『恋に身かふる』→『しぐれ』の関係も承認するほかない。

とすれば、古本『しのびね』・現存本『しのびね』・『恋に身かふる』・『しぐれ』の四者は、いったいどのような関係にあったのだろうか。この問は難問だ。『しぐれ』にはさらに類似の物語が群として存在するのであったから。単純な図式的改作相関図を作成想定しえたところで事足りそうには思えないのである。確かなことは、坩堝の中の化学変化にも比すべき改作過程の中に、物語が変貌してゆく秘密が隠されているらしいことであり、それは、『古とりかへばや』が『今とりかへばや』に改作されたような一回的個性的改作の視点からは捉えきれないもののようだ。『しぐれ』に至る改作のあり方は、先行する種々の物語を併呑し、しだいに類似の相貌になってゆくような類型的没個性的改作のあり方なのである。見方をかえれば、それはある種の普遍のすがたに牽引されてゆくような改作のあり方なのであり、そのような改作をうながす根源には書くことの奥に〈語り〉の問題がひそんでいるように思われる。〈語り〉とは類同化する力でもあったからである。

『しぐれ』ⅳでは、左大将家の人々によってかけられていた「おまつり」なる呪縛が解け、男君は承香殿にいる女君を発見、出家へ、と『しのびね』と相似た展開相を示す。だが男君が女君を発見した時点で、既に女君が帝妃として懐妊している、という相違点は重要だ。呪縛が解けたとき、二人の関係はもはや回復不可能の状態にあったということなので、男君は決定的に遁世へと追い込まれてゆくわけなのだ。『しのびね』同時点では、女君はまだじっと耐えて帝に靡いていない。二人の愛情関係は解消していない。それだけにそこから離脱遁世してゆく男君の意志と決断に哀切な悲劇感が漂うのであった。『しぐれ』では、形象が物語世界を支えるというところから、筋の展開の論理が優先するところに歩み出ているようである。先験的に設定されてある普遍なかたちに収斂してゆこうとするすがたであり、それは同時に室町時代物語の本質に関わるものでもあった。

〔Ⅴ〕 Ⅴでは女君のその後の栄耀と子孫繁栄、成人した若君と父入道との再会などが語られ、後日譚的色彩が濃厚である。具体的にどこからと指定することはむつかしいが、大幅な増補改作の手が加えられた跡が歴然としている。〔Ⅰ〕においてもふれたが、男君の妹は「春宮の女御」なのであった。であるのに、女君が皇子を生むと「いまだわう子もおわしまさぬ事」という。この矛盾は冒頭部の古本への凭れかかりとⅤ部分の増補性とを二つながら明証するものだろう。また、便宜、物語年次を記した梗概を一覧しても第六年以降の叙述がことのほか性急であり、和歌の見えぬこととも併せて、単なる後日譚的性格の所為に帰して解釈できる余地はあるものの、当該部分の古本によらない後補性をあらわす

ものとみたい。

さらに前掲『風葉集』歌に戻ると、①に「ないしのかみ」、②に「しのひねの中将」とあったことに気づく。『風葉集』における官位は、物語世界内の最終官位により呼称されるとするのが通説であるが、とすれば、女君が中宮から女院にまで栄進するくだりの後補性はここでも明らかであり、帝と結ばれたことはまちがいないにしても、とってつけたような栄耀は語られていなかったにちがいない。推論を加えてきたごとき古本の〈しのびね〉的主題からすれば、女君のことさらな栄耀はなくもがなの部分であり、現存本おけるに右の主題性の後退と当該部分の増補とは相関関係があろう。古本においても出家したことが確かな男君が「しのひねの中将」と在俗時の呼称であることも、出家後の動静については記述するところが少なかったこと、裏返せば、未練を残しての男君の出家と残された女君が帝と結ばれるあたりで古本『しのびね』一篇は閉じられていたことになろうか。

ところで『しぐれ』はというと、こちらでも女君の子孫繁栄のことが語られる（ただし若君誕生のことがないから父子再会譚はない）が、本文末尾に「ひめきみのくわほうも、中将殿のまことの道に入給ふも、みなこれくわんおんの御りしやうなり」との一文が置かれている。女君の栄華も、男君の出家遁世も、各々に観音の御利生だというので、一篇を、結局は清水の利生譚（二人の出会いからして清水を舞台としていた）として調えようとするのである。一見取ってつけたような不自然な印象を感じぬでもないが、再考するに、しのびね型の筋を踏襲しつつも、初めから女君は帝と結ばれ栄華の道をあゆむべく仕組まれていたし、男君は悲恋から遁世すべく仕組まれていたのであった。だから、末尾の一文は単なる付加ではなく、物語が収斂する結果としてあるので、微妙だが紛れようもなく、古本現存本両『しのびね』との質的懸隔を象徴するものとなっている。『しぐれ』では、〈しのびね〉的主題はもはや作品の主題ではありえなくなっているし、物語世界の形象による緊迫感も、現存本『しのびね』に比して失なわれてきている。だから、これをもって物語（文学）の崩壊、解体とみることも確かにできよう。しかし、一方からの崩壊解体は、いま一方からの別種の力学の誕生と踵を接しているのであった。従前とは異なる論理により捉えかえされるとき、室町時代物語たる『しぐれ』が、前代の物語史の側からは解体とみえる姿をさらしつつ再生するのである。

その間の機微についてはもはや詳述する余裕もなくまた当初の目的をも逸脱するので別稿を期すことにしたいが、『しぐれ』のi～vを、(i)出合い→(ii)妨害と出奔→(iii)さすらい→(iv)再会と出離→(v)栄華による鎮魂、というぐあいに構造を一般化してみると、ここで我々は室町時代物語の根幹に関わる問題に逢着していることに気づくのである。[註15] 私は、前稿において、有名な横笛・滝口の哀話が、一片の史実から、次第に『平家』のさまざまの語りの中で自律的に成長し、変貌をとげ、遂に室町時代物語『横笛草紙』に至る過程を追跡的に明らかにし、結果において他に類似の基本構造をもってしまう不思議さに注目した。その不思議さが、古本『しのびね』→現存本『しのびね』→『しぐれ』の変容の系譜の

場合にも再現されているのである。『しぐれ』i～vは『しのびね』I～Vに対応しているのだから、『しのびね』もまたこのような基本構造を内包していたことになりはするが、『しのびね』ではまだ形象が生きていて一括りにできないこと既にみてきたとおりである。だが、右の系譜を、室町時代物語の側からたどり直すならば、『しぐれ』をも成り立たしめている根源的な力に招き寄せられるようにして類似構造化されてくる過程としてもみえてくると思うのである。

5

現存本『しのびね』を軸に、古本『しのびね』の様態を探り、『しぐれ』との比較を通じて、近似的作品系譜における変容の跡をうかがい、物語史の一面に光を与えるべく冗長なノートを書きつけてきた。現存本『しのびね』の特質には、各段の比較分析では必ずしも顕在化しにくい面、たとえば、煩瑣なまでに時の記述に詳しく、物語の進行が、物語世界の開展につれて生成してくる時間に従うのではなく、枠としてある外的時間に寄り縋り支配をうけながら語りすすめられる、といった事例、あるいは文章の問題[註16]、などを明らかにし、それを現存本『しのびね』の位相を見定めるうえでどう考えたらよいか、というところまで考察を加えるべきなのであるが、紙幅を大幅に費やしたいま省略に従い、前節までの議論を整理して、ひとまず稿をとじることにしたい。

古本『しのびね』は、平安後・末期に成立したかと推定される物語で、現存本『しのびね』はその古本を改作したものである。従来古本『しのびね』→現存本『しのびね』の改作関係については、縮少梗概化による改作とみる見方が有力であったが、単なる縮少梗概化とはみなしえず、作意を異にした改作関係としてみるべきである。すなわち、古本・現存本とも、大略、女の視点からは、男君との仲を裂かれ、帝と男君との板挟みのつらい境遇のなかで〈しのびね〉に泣くという側面があり、男の視点からは、帝に女君を奪われ、悲恋の思いから遁世するという側面があり、後者が前者をつつみこむ構造を共通にもっていたらしいのだが、古本が前者の女君の〈しのびね〉に主題性をおいた物語であったらしいのにたいして、現存本は、〈しのびね〉の主題性を後退させ、決然たる出家をとげる男君のすがたをえがき、悲恋遁世譚的色彩を色濃くして後者に力点を置いて改作しているのであった。このような古本から現存本への推移には、直結するにはなお手続きが必要であろうが、平安後・末期の物語が鎌倉・南北朝期の物語へと変貌してゆく物語史の様相をうかがうにたる端緒があるとはいえよう。

現存本『しのびね』はさらに一転複雑な改作過程を経て『しぐれ』に至る。この改作過程とそのようにつき動かす力の中にひとつ秘密が隠されていよう。この点についてはなお追求の積み重ねが必要であろう。『しぐれ』では〈しのびね〉的悲嘆も決然たる悲恋遁世も、物語世界形象の緊張感からは主題といえなくなっており、物語の解体崩壊を思わせるが、出合い→妨害と出奔→さすらい→再会と出離→栄華による鎮魂、という底に沈められた構造により他の室町時代物語群と通底する。類似構造をもってしまう

ことは、常套的な詞章・紋切り型の表現とともに、語り手＝作者と聞き手＝読者との間に架けられた了解機能として深層構造（＝型）が機能しているからである。それは、語り手と聞き手との間に共有空間を樹立することによって伝達を成り立たしめる〈語り〉（＝物語）の始原的本質的機能によるもので、その点では『しぐれ』はかえって物語の始原回帰の側に近いものに変容してきていることがうかがわれるのである。

註

1　中野荘次氏「風葉和歌集考・下」（『国語国文』三の二）。

2　国語国文学研究史大成『源氏物語・上』所収翻刻により現行字体に改めた。

3　津本信博氏「吉水院蔵『源氏供養』に関する覚書」（『平安朝文学研究』二の十）参照。

4　〈しのびね〉の用語例から推して『源氏』以前に溯るとは考えられないようである。4の〔Ⅲ〕を参照されたい。

5　桑原博史氏『中世物語の基礎的研究』。なお以下の引用本文も同書所載翻刻による。

6　横山重・太田武夫氏校。同所収本は永正十七年古写本であるが、この本文系統が古態をとどめる点については松本隆信氏に論がある（「擬古物語系統の室町時代物語—しぐれ・若草・桜の中将・志賀物語外—」・『斯道文庫論集』四）。

7　市古貞次氏『中世小説の研究』第一章。

8　中野幸一氏『源氏物語』に見える「昔物語」（『物語文学論攷』所収）。

9　後述（4の〔Ⅳ〕）のように『しぐれ』は古本『しのびね』をも源流としている。『しぐれ』から古本『しのびね』の古態を透視することに根拠がないわけではない。

10　『浜松中納言物語』に類似の『しのびのね』二例があるが、時鳥に関わる一対の贈答歌中に詠みこまれたものである。

11　中野荘次・藤井隆氏『増訂校本風葉和歌集』による。

12　三谷栄一氏『物語文学史論』。

13　この項大槻修氏「しのびね物語の改作態度」（『甲南女子大学紀要』十）に御教示をえた点が多い。

14　註6前掲論文。

15　拙稿「横笛草紙の成立まで—室町時代物語論のために」（『日本文学』昭52・2）。本稿と補完しあうところがあるので併読願えれば幸甚である。

16　文章の問題については桑原氏（前掲書）に既に論ずるところがあった。

〈付記〉

本稿は、かって物語研究会の席上口頭発表した「しのびね物語考」および「擬古物語の一系譜—『しぐれ』のことなど」の礎稿をもとに加筆改稿したものである。改稿に際し抜刷を賜わり御教示くださった大槻修氏、ならびに種々御懇篤な御注意をくださった奥津春雄氏に特に感謝の意を表したい。